サミット開催を契機に地球に優しい〝町おこし〟

地球環境基金の募金活動のリーダーシップをとった岩見沢市新エネルギー広報普及連携会議の皆様。募金箱はいまもメンバー全員の事務所や店舗に設置されている

洞爺湖サミットに先立つ4月、開催地北海道では、『北海道環境宣言』を発信。「地球を守る」「もったいない」「自然と共生する」の3つの心で、道民一人ひとりが足元から環境を考えようという、まさに『環境行動元年』となりました。

市町村、関係団体、企業などが協力して行われたさまざまな取り組みのなかから、「環境のまちづくり」に向け、着実な第一歩を踏み出した岩見沢市を紹介します。

ユニークなかたちの「地球環境基金への寄付目録贈呈式・式次第」

2008年10月3日「新エネルギーセミナーin岩見沢」にて贈呈

サミット開催に合わせていわみざわ環境週間を創設

洞爺湖サミットの開催期に合わせ、岩見沢市では、新たに「いわみざわ環境週間」を設定。環境にやさしい町づくりに向け、市民一人ひとりが自らの生活や活動を見直し、気づきから行動へとつなげることを目的として、啓発イベントや体験プログラムが企画された。第1回の開催は6月28日から7月12日。「高めよう環境、減らそう ごみ・CO2」をテーマに、「地球温暖化パネル展」や「環境美化の日」、「エコ住宅展」などが開催された。「地球温暖化パネル展」では、市役所・図書館など市内5カ所を会場に、温暖化の仕組みや影響などを解説したパネル展示が行われた。また、「環境美化の日」には、市内事業所、学校、町内会など117カ所で市民がごみ拾いや植栽活動に参加。「エコ住宅展」では、企業のホールを会場に、古民家や老建築の再・蘇生、太陽熱利用機器などを展示。地元中学校美術部による雪の彫刻の展示も花を添えた。

「長期的な取り組みを必要とする地球規模の環境対策に着手するためには、やはり洞爺湖サミットはよいチャンスだったと思います」。岩見沢市環境対策室・室長の佐藤義人さんは、環境週間をそう述懐する。

岩見沢市と新しい町のシンボルJR岩見沢

【岩見沢市】 石狩平野の中央に位置し、かつて道内有数の産炭地域であったことから交通の要衝として発展する。市街地の周囲には田園地帯が広がり、利根別原生林や東部丘陵地帯など自然も豊か。道内有数の豪雪地帯でもある。炭鉱の閉山により周辺市町の人口が減少し、現在約9万人。

【岩見沢駅】 2000年の焼失以来、待ち望まれた岩見沢駅舎が2007年完成。2009年春には、市民の文化・教養活動などの発信拠点となる有明交流プラザ、線路の南北を結ぶ有明連絡歩道なども完成し、複合駅舎が誕生する。新駅舎の外装には、鉄道とともに発展してきた岩見沢らしく、町の歴史や地域文化を象徴するレンガと、国内外から集めた古レールを使用。過去から未来へと町の記憶をつなぎ、町に活力を呼びもどす市民の願いが込められている。

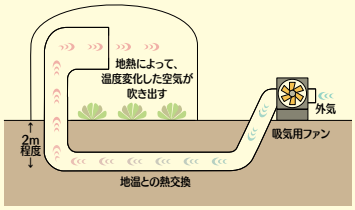
駅舎窓枠には世界各地の古レールを使用

新エネルギーの利用開発に取り組む北海道岩見沢農業高等学校の皆さん

岩見沢市の主要産業は農業。道内有数の米の産地で、キャッチフレーズは「安全・安心・おいしい北海道岩見沢産“大地のこだわり情熱米”」

地熱利用のしくみ

熱交換によってハウス内の温度は、夏は20℃以下、冬も5℃以上に保たれる



ハウス栽培に地熱利用システムを利用

「環境問題を解決する糸口として、人と人との結びつきや心の交流が大切だと思っています。自然豊かな岩見沢では、CO2の削減と言っても市民の皆さんにあまり切迫感がない。それでも情報発信と対話による情報交換を続けていけば、全体の環境意識が上がるときがくると考えています」。

炭鉱の町からエコ発信の町づくりに向け

2008年10月30日、岩見沢市内で、「新エネルギーセミナーin岩見沢」を開催。北海道経済産業局、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）、岩見沢市の主催により、風や雪などの自然エネルギーを農業に利用し、低コスト・CO2削減につなげる先進的事例が紹介された。ハイブリッド・小型風力発電装置の農業利用、雪氷冷熱エネルギー利用による貯蔵・輸送方法など市外企業の研究発表に混じって、北海道岩見沢農業高等学校も「地下2mの熱エネルギー～農業生産における地熱利用の取り組み～」をビデオ発表。大気と地中の温度差という北海道ならではの特性に着目した技術で、頼もしい次世代の研究成果として実用段階に入っている。ほかに同校は、洞爺湖サミット関連行事においても、G8メンバーとの交流会、プレスツアー、北海道高校生環境サミットなどに参加。地熱や雪の農業利用などの発表を行っている。

さらに当日、岩見沢市新エネルギー広報普及連携会議によって集められた地球環境基金への募金が、独立行政法人環境再生保全機構に贈呈された。

これは、「いわみざわ環境週間」に際して、貢献度が目に見えることもしたいという連携会議の発案により「地球温暖化ストップ展」と「エコ住宅展」の会場に地球環境基金の募金箱を設置して集めたもの。なお、同連携会議は、商工会のメンバーなど

が参画し、岩見沢市と協力して町づくりに取り組んでいる民間会議で、環境週間終了後も構成員が順番に募金活動を継続している。

「かつて岩見沢は石炭産業ゆかりの町でした。今度は発想を変えてクリーン・エネルギーを発信したい。そんな思いから連携会議はスタートしています」と、メンバーの一人が語る。化石燃料ゆかりの町から環境の町へ。そして再び活きいきした町づくりを。町の新生を目指し、市民、行政、若い世代、産業界……、手を携えての取り組みが始まっている。

新聞報道された「地球環境基金」への目録贈呈式

「新エネルギーセミナーin岩見沢」における地球環境基金への寄付目録贈呈式の模様は、読売新聞、いわみざわ新聞で報じられた

写真：謝辞を述べる地球環境基金担当冨岡理事

新エネルギー取り組み紹介

岩見沢でセミナー

環境に優しい新エネルギーについて考える「新エネルギーセミナーin岩見沢」（北海道経済産業局、岩見沢市など主催）が、岩見沢平安閣で開かれた。

小型風力発電や雪エネルギーなどに関する報告のほか、岩見沢農業校の生徒による地熱利用の取り組みのビデオ発表などが行われた。

また、当日は、市内の企業や飲食店で募金を呼びかけた「地球環境基金」への寄付金贈呈式も行われた。

平成20年11月11日（火曜日）読売新聞より